第四講　スポーツ論・文化人類学〈選択肢中心〉

一つのチームが、孤独な叛乱（はんらん）を最後まで貫こうとしている。役割遵守を前提に守備的布陣を敷く組織的フットボールに背を向け、プレーヤー一人一人の個性と直感力の発露をのびのびと肯定する［Ⅰ］なブラジル。自由な快楽にあふれ、瞬間のプレーに陶酔できるチームをしばらくぶりにワールドカップの場で見たような気がする。

南米予選で苦戦し前評判の低かったブラジルであったが、韓国での一次リーグ三戦を全勝で通過して存在感を示し、その後の攻撃的フットボールも止まるところを知らない勢い。復活したロナウドを筆頭にリヴァウド、ロナウジーニョの三人で構成された前線の連携の創造性と攻撃本能は、痺（しび）れるほどすばらしかった。

だが日本のメディアは、予選から見慣れたブラジル守備陣の不安定さを指摘しつづけた。個人技に頼るだけのチームであり、組織的守備戦術を欠いた、「時代遅れの」チームであると暗に批判もした。とりわけ監督経験者のコメンテーターが、連日のようにそうした不安を署名記事にし、攻める快楽よりも失点する不安を強調することで、勝敗原理の支配のなかでわたしたちのフットボール観戦の文法がいかに抑圧されているかを、はからずも代弁した。

現代ヨーロッパにおいて主流となった、中盤からプレスをかけつづける守備的戦術を起点としながら組織的な動きのなかで素早くパスを回して攻撃をしかけるフットボールは、基本的に「勝利」が絶対視されることで成立する戦略である。ゴールへといたる創造的な過程やゴールそのものの示す強度の質を問うことなく、選手を働く駒にみたて、［Ⅱ］で均質な「得点」に還元されてしまったゴールを一つでも多く奪えば勝利するというゲーム上の皮相な現実をそのまま受容する冒険心なき感性が、結果がすべてと考えるこの勝利至上主義的な戦術を完成させた。

［A］国家の威信がかかるＷ杯という場において、勝利至上主義はより強い絶対性を獲得する。そこでは、結果だけを求める退屈なリアリズムが、美しさにこだわる遊戯的なファンタジーへの欲望をつねにねじ伏せるのである。

今回のＷ杯もまた、この構図を見事に再現した。ヨーロッパ的合理戦術の渦中にありながら、余剰としてのファンタジーや個人技にこだわりを見せるフランス、イタリア、スペインといったチームの奮闘は、その［B］によって空しく中途で立ち消えて

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

いった。ファンタジーと組織の奇跡的合体を予感させたアルゼンチンも、イングランドやスウェーデンの、十一人で守るもはやフットボールとは呼びえない極端な守備的布陣を突き破れず、ペースを乱しフットボール的運を喪失したまま敗退した。ただひとりブラジルだけが、失点することへの恐怖を忘却したかに見えるバックスの破天荒な攻撃参加と、フォワードの目もくらむ美技とインスピレーションあふれるゴールの数々によって、勝敗原理によって曇らされたフットボールの別の快楽原理が存在しうることを示そうとしている。

日本での開幕日に、8対0という記録的な大差がついて凡戦といわれたドイツ対サウジアラビアの試合は、ある意味でいま「なにがフットボールなのか」を問う、きわめて［Ⅲ］なゲームだったともいえる。体力、戦術、精神的強靭さ、あらゆる面においてドイツがどれほど優位にあったとしても、このゲームは「勝つことだけでは美しくない」というフットボール的真理を見事に体現した試合でもあったからだ。

守りを固め、カウンターのサイド攻撃から中央にクロスを上げて頭で合わせる。機械のようにプログラムされたこの速攻の戦術を九〇分やり通す［Ⅳ］な「魂」。だがそれは、フットボール的機知と遊戯性と本能への信頼を欠いた、心なき魂ではないのか。ドイツは退屈に得点しつづけ、サウジのわずかな攻撃の芽をも粗っぽいスライディングタックルでことごとくつぶしつづけた。一点の美しいゴールを奪おうという創造力を捨て、戦術と体力をひたすら失点を防ぎ、点差を広げることに消費するゲームに、私はもはや「フットボール」をかけらも感じなかった。

ひるがえって、対イングランド戦のブラジルである。後半十二分、絶好調のロナウジーニョが勢いあまって退場処分を食らうと、一人足りなくなったブラジルは優雅にボールを回しはじめた。ゴール前でもボールを慈しむように周囲へと散らし、シュートのタイミングをかぎりなく遅延させてはゲームのテンションを持続させた。残り何分、という試合時間の抑圧が試合からすっと引いていったのはこのときである。

そこには「永遠」がある、と私は思った。ブラジルはリードして時間稼ぎをしているのではない。そうではなく、ボールと出合った路地裏のフットボールで日が暮れるまで時間を忘れて戯れていたあの少年の無垢の「永遠」が、そのとき甦ってきたのだ、と。小さなはだしの足が記憶するあの永遠の陶酔を、試合のなかに不意に再現させてしまうというような即興的な無意識こそが、フットボール文化の本質に横たわる秘儀的な真実であるはずだ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二十一世紀最初のＷ杯がドイツとブラジルの決勝となったことは象徴的である。たしかに「勝負」の決着は、今日つく。だが、フットボールの未来像にかんする決着まで今日ついてしまうわけではない。フットボールのあるべき未来像とは、結果だけを求める合理サッカーに対するブラジルの孤高の［C］を、サッカーに関わる人々がどう受けとめてゆくかにかかっているのである。

（今福龍太「フットボールの快楽」）

問１　空欄［Ⅰ］〜［Ⅳ］に入れるのに最も適当なものを次からそれぞれ選びなさい。

①　創造的　②　記号的　③　攻撃的　④　象徴的　⑤　抑圧的

問２　空欄［A］に入れるのに最も適当なものを次から選びなさい。

①　なぜなら　②　とりわけ　③　けだし　④　しかし　⑤　すなわち

問３　空欄［B］・［C］に入れるのに最も適当なものを次から選びなさい。

①　矛盾　②　調和　③　総合　④　反乱　⑤　分断

問４　筆者のいう「勝敗原理」に支配されたフットボールの形として、適当なものを次から二つ選びなさい。

①　一点でも多く取れば勝ちであるから、勝っている間は点を取ろうとせず、ひたすら守備に専念する。
②　攻撃をするときでも、組織的な役割分担を崩さない。
③　試合の運び方が機械のようにプログラムされているので、選手の闘争心は抑圧されている。
④　勝利するという目的に照らせば合理的であるが、見ていて退屈であり、フットボールらしさを感じない。
⑤　「勝敗原理」を基本としながらも、快楽原理的要素を採り入れたチームは見当たらない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５　波線部「ひるがえって」以下末尾までに述べられていることと最も異なるものを次から選びなさい。

①　一人足りなくなったブラジルがボールを回しはじめたとき、選手の動きが優雅でのんびりしているように見えたため、筆者は、試合時間の抑圧が試合からすーっと引いていくのを感じた。

②　一人足りなくなったブラジルがボールを回しはじめたとき、筆者は、時間を忘れていつまでもゲームを続けていたいという少年の無意識の無垢の欲望を見てとった。

③　一人足りなくなったブラジルがボールを回しはじめたとき、筆者は、選手の動きの中にいつの時代でもどの国でも見られる少年たちのフットボールに興じる姿を見出した。

④　ドイツ対ブラジルの決勝戦は、勝敗原理対快楽原理のぶつかり合いという意味を持っていると筆者は考えている。

⑤　決勝戦で例えブラジルが敗れても、サッカーに関わる人がよく考えて真実を見出してくれれば快楽原理がすたれるはずはないと、筆者は考えている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　今福龍太＝いまふく　りゅうた（一九五五〜）東京大学法学部卒・テキサス大大学院修了・東京外国語大大学院教授・文化人類学者

語句

直感＝ちょっかん→瞬時の感覚的判断・インスピレーション
cf同音異義語……直観→物事の本質を一気に理解する・インテュイション
陶酔＝とうすい→うっとりする・恍惚（こうこつ）感にひたる
代弁＝だいべん→本人に代わって語る　類似表現としては、「象徴」「体現」
還元＝かんげん→もとの姿にもどすこと・単純化すること
cf同音異義語……換言→言い換える　甘言→口先だけのうまいことば
皮相＝ひそう→物事の表面、上っ面だけ・表層
至上主義＝しじょうしゅぎ→あるものをこれ以上ない最上のものと考える
（例）芸術至上主義＝唯美主義、耽美（たんび）主義
機知＝きち→場に応じた鋭い才知・ウイット
威信＝いしん→プライド
合理＝ごうり→理性的・理屈通り・効率的

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）スター選手の美技にトウ酔する　①投　②陶　③盗　④蕩　⑤糖

（イ）法令をジュン守する企業文化　①純　②準　③淳　④殉　⑤遵

（ウ）彼が当社の筆トウ株主です。　①頭　②党　③等　④当　⑤塔

（エ）ユウ雅な立ち居振る舞いを見せる　①雄　②勇　③優　④遊　⑤悠

（オ）年間王者の地位をカク得する　①覚　②確　③画　④獲　⑤穫

（カ）世間をにぎわす事件のカ中にある　①火　②渦　③家　④過　⑤荷

（キ）余ジョウな人員を別な部署へ回す　①常　②情　③場　④乗　⑤剰

（ク）攻撃サッカーをタイ現したチーム　①帯　②隊　③体　④対　⑤態

（ケ）大会の開催日がチ延された　①弛　②治　③遅　④置　⑤致

（コ）個人技と組織との奇セキ的融合　①績　②跡　③積　④籍　⑤赤

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　スポーツ論・文化人類学

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

ブラジル＝プレーヤーの個性と直感を
肯定する攻撃的フットボール
攻める快楽重視
美しさにこだわる遊戯的なファンタジー

主な対比

敵役＝現代の主流

ドイツ・イングランド・スウェーデン
＝役割遵守・組織的守備的フットボール
失点する不安の強調
勝敗原理の支配
結果だけを求める退屈なリアリズム

小さな対比

脇役

●**フランス・イタリア・スペイン**（ヨーロッパ的合理戦術＋余剰的ファンタジー）…矛盾
●**アルゼンチン**（ファンタジー＋組織）…運の喪失

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

サッカー・ワールドカップが入試素材です。楽しいです。二〇〇二年の日韓共催大会の模様、ならびに近年のサッカー界の動向を、気鋭の文化人類学者が論じています。プロの文章家がフットボールを論じるわけですから、見事な対比分類が現れています。

問１《空欄補充》

Ⅰは、ブラジルにかかる説明で、「役割遵守～守備的～組織的」との対比です。したがって③「攻撃的」と入ります。第二段落にも「創造性と攻撃本能」とあり、ヒントになってます。Ⅱは、敵役キーワードです。「ゴールへといたる創造的な過程」「美しさにこだわる遊戯的なファンタジー」との正反対・対比です。つまり意表をつくスルーパスを華麗にシュートするとか、四〇メートル弾丸ライナーのボレーシュートとか、オーバーヘッド・キックとか質を問わない、ただの「得点」「数字」ということです。どうやって得点しようと一点は一点というわけです。答えは②「記号的」です。Ⅲは、〈ドイツVSサウジ〉という一ゲームが「なにがフットボールなのか」を問うている、つまり具体的なものが抽象的なことがらを指すわけです。〝ハトは平和の象徴〟というように。こうした〝具体物→抽象的意味〟という表現を「象徴」というのです。④「象徴的」が正答。ちなみに最終段落にも「象徴」という言葉がありますね。こちらも同様に〈ドイツVSブラジル〉という一ゲームが「フットボールのあるべき未来像」という抽象的なものを示している、ということです。Ⅳは、敵役キーワードです。「守備的組織的な方です。「役割遵守」です。したがって、「個性」や「自由な快楽」を縛る⑤「抑圧的」と入ります。

問２《接続語補充》

まずＡの前段落は、ヨーロッパ・フットボールの「主流」（英国のプレミア・リーグとか、スペインのリーガ・エスパニョーラとかドイツのブンデス・リーガとか、イタリアのセリエＡとか）が「勝利至上主義」だとの説明があります。空欄の後、「国家の威信がかかるＷ杯」ではその「勝利至上主義」が「より強い」とされます。したがって〝絞り込み・強調〟を意味する②「とりわけ」が正答です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３《空欄補充》

B は、フランス・イタリア・スペインの説明です。今回の主役キーワードと敵役キーワードの〝ハーフ&ハーフ〟です（ピザならおいしそう）。ヨーロッパの主流「合理戦術」とファンタジー・個人技の融合です。でもうまく合わなければ二律背反で①「矛盾」です。さて、一人ブラジルだけが「守備的・組織的・合理的」フットボールに背きます。第一段落にも「孤独な叛乱」とあります。というわけで C は④「反乱」です。「叛乱」と発音も意味も同じです。

問４《内容説明》

「『勝敗原理』に支配されたフットボール」は敵役側です。「支配された」なんて虐（しいた）げられた感じ・否定的ニュアンスが伝わってきます。タイトル「フットボールの快楽」の反対なわけです。②・④が正解です。①は「勝っている間は点を取ろうとせず、ひたすら守備に専念」が×です。ドイツはサウジから８点取りましたよ（野球の試合か！）。記述に反する誤りです。③はどうでしょう。「抑圧」という言葉自体はＯＫですが、「闘争心は抑圧」はマズイです。組織的ではあっても試合に勝つ気は満々です。「闘争心」がなければそもそも試合になりません。みんなオテテつないで、仲良くゴールインてか。はい、記述に反する誤りです。⑤はどうでしょうか。「見当たらない」とありますが、見当たりますよ。アルゼンチンがそうです。フランス・イタリア・スペインも。というわけで記述に反する誤りです。

問５《内容説明》

③の「いつの時代でもどの国でも見られる」がしらじらしいほどの不当な全称判断です。「孤高」「孤独の叛乱」のチーム、ブラジルの説明なのに、あらゆる国に見られる話になってしまいました。本文にないのに〝すべての・あらゆる〟と大風呂敷を広げてしまうのは間違いなのです。大きすぎず小さすぎず、過不足なく、本文に従いましょう。今回は間違い探しの問いですから、この③が正解。その他は本文の記述と合致しています。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問１　Ⅰ＝③　Ⅱ＝②　Ⅲ＝④　Ⅳ＝⑤　問２＝②　問３　B＝①　C＝④

問４＝②・④（順不同）　問５＝③

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第四講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）③　（オ）④
（カ）②　（キ）⑤　（ク）③　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）陶酔　（イ）遵守　（ウ）筆頭　（エ）優雅　（オ）獲得
（カ）渦中　（キ）余剰　（ク）体現　（ケ）遅延　（コ）奇跡

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。